

日本の造形運動とデザイン教育にみるバウハウス思想の受容と変遷

The Acceptance and Change of the Bauhaus Theory in Japanese Design Movement and Education

工学研究科都市系専攻 五月女絢

バウハウスが日本のモダニズム運動に影響を与えたことは自明であるが、その中身については語られていない。本研究では、造形運動とデザイン教育の二方向からバウハウス思想の受容を総合的に捉えた。その結果、日本におけるバウハウス受容は《分散的》という言葉で定義でき、さらにこのような受容形態によって、建築、工芸、デザイン教育といった各分野からの独自の解釈が付け足され、日本のモダニズム運動のさらなる前進を可能にしたことを明らかにした。

That Bauhaus was affecting the modernism movement of Japan is obvious, but it is not told about its contents. In this study, I comprehensively capture the acceptance of Bauhaus ideas from design movement and design education. As a result, the acceptance of the Bauhaus in Japan can be qualified by the word "distributed", furthermore, such "distributed" acceptance allow people in architecture, crafts, and design education to add own interpretation. It can be said that it has enabled further advancement modernism movement in Japan.

1.はじめに

(1)研究の目的と背景

1919年、バウハウスはドイツのワイマールにて創設され、デザインの教育機関としての歩みを踏み出した。1933年、ナチスによって廃校に追いつめられたため、活動期間は14年と短かったものの、モダニズム運動を語るうえで欠かすことが出来ないほど大きな存在となった。バウハウスは、工芸・写真・演劇なども含む、美術と建築における総合的なモダンデザイン教育をしたことで知られている。その教育の現場を一目見ようと、日本からも仲田定之助を始め、多くの建築家やデザイナーがバウハウスを訪れた。彼らは、バウハウスの教育理念や教育カリキュラム、思想を日本に持ち帰り、日本の人々に紹介し啓蒙活動を行った。こういったかたちで、日本の建築家やデザイナーはバウハウス思想を受容したのである。

しかし、バウハウスが総合的な考えを持つ教育機関であるにも関わらず、バウハウス思想を受容した日本の団体の個別の研究しか存在しない。このことはバウハウスの受容が個別に起こったことを示唆しているが、本稿では、バウハウスが日本に与えた影響を造形運動とデザイン教育の二方向から総合的に考察し、バウハウス思想の受容の全体像を捉えることを目的としている。さらに、この考察を通して日

本の造形運動とデザイン教育の歩みを詳らかにし、バウハウス思想の受容形態が持つ可能性を示すことができるようになる。

さらに、なぜバウハウス思想の受容は個別に語られているのか、その原因を日本のデザイン教育と造形運動から読み解くことができよう。

(2)論文の構成と研究方法

まずバウハウスの基本的理念を歴代校長の思想から示し、日本人留学生、見学者が日本にバウハウスはどのように伝えられたのかを明らかにしていく。ここでは、既往研究と1930年前後に書かれた雑誌を資料として分析する。そして、日本がバウハウスから受けた影響を、「デザイン教育」と「生産体制」について分けて論述し、それぞれの分野でどのような受容形態があったのかを考察し、その変遷を明らかにする。最終的に、この2つの受容を総合的にみていくことで、日本のバウハウス思想の受容が分散的であったことを示し、さらにこのような分散的な受容の背景を日本の造形活動やデザイン活動の思想的なかで探っていくこととする。

(3)本研究の位置づけと新規性

従来の研究では、日本のバウハウス受容を俯瞰的に捉えてその全体像を示したものはない。ある特定の団体、人物、時代に焦点を当てた部分的なバウハウス受容の研究がほとんどである。このことはバウ

ハウスが分散的に受容されたことを示唆しているが、個々の受容を同時に考察していくことで、分散的な受容をせざるを得なかった理由が日本の造形活動やデザイン教育において一貫して見出すことが出来る⁴と考える。

2. バウハウスの思想と日本人留学生

バウハウスに留学した日本人、水谷武彦、山脇巖、山脇道子、大野玉枝の4人が、バウハウスで受けた授業を示し、そしてどの教育や思想に特に興味を示したのかを明らかにする。しかし、彼らの留学時期はそれぞれ異なるため、その当時のバウハウスの思想を読み解く必要がある。そこで、バウハウスの歴代校長の思想を考察する。

2-1 歴代校長の思想

(1) ヴォルター・グロピウス

1919年、バウハウス創設時にグロピウスが発表した「バウハウス宣言」によると、グロピウスが目指したものは、「アカデミー教育の否定」、そして「機械と芸術の統一」の二つであるといえる。これらを最終目的として、以下の3つの思想を展開していったといえる。

①「単一芸術」の達成

グロピウスは、すべての造形活動を包括するものは、人間生活のすべてに参加する建築であるとし、その建築を「単一芸術」と定義した。そして、建築という「単一芸術」によって統合される生活空間のすべての造形物の中に、一貫する近代性の創造をグロピウスは目指した。¹グロピウスが、カンディンスキーの造形理論といった、ものづくりに共通する基礎教育をバウハウスのカリキュラムに取り入れたのは、「単一芸術」の達成を目指したからであると考えられる。

②手仕事の原理に基づいた機械化の肯定

グロピウスは、手仕事の原理に基づいて、機械という新しい生産方式を積極的に肯定しようとするモリスの考えを引き継いだ。²グロピウスによれば機械の稼働中は手仕事の参加が不可能であるため、材料、有用性、技術、生産コスト、といった問題のすべてが事前に解決されていなければならず、その決定に手仕事で学んだ実体験が生きてくるといふ。³そこで、機械も手仕事の原理に従わせることを目指した。

③「国際建築」

「国際建築」は「機械工学や静力学、光学、音響学といったものの限界に制約されるものである」と共に、「素材と構造による」「プロポーションの法則」によって決定されるとしており、⁴それ自体の目的や内的法則に従って機能的に造形され表現されたもの

であり、かつてのアカデミー建築のような装飾をいっさい排除されたものであると、グロピウスは定義している。「国際建築」は、機械様式を承認し、さらにその機械による制限を乗り越えようとする造形活動であり、全人類に共通しうる様式である。⁵グロピウスがまさしくバウハウスにおいて実現しようとした造形活動そのものだといえよう。

(2) ハンネス・マイヤー

グロピウスがバウハウスを去るとき、彼はスイス人のハンネス・マイヤーを後任の校長として任命した。建築家でもあり、教育家でもあるマイヤーは、自身を科学的マルクス主義者であると称していた。彼は「建築＝機能×経済」の考えのもと、建築をバウハウスの教育体制の中核へと押し上げ、芸術的思想を排除し、理論的な解法をもった建築の造形を目指した。⁶グロピウスの機械主義を受け継ぎ、さらに社会や経済との関わりといった示軸を取入れることにより造形活動を理論化させたといえよう。

(3) ミース・ファン・デル・ローエ

マイヤーの後継者であるミース・ファン・デル・ローエは、芸術的思想を再びバウハウスに引き戻し、建築芸術の最終目的は機能主義の追及であると主張した。⁷しかしミースの時代は、ナチスからの圧力ゆえ教育組織としての再建を試みた時期である。そのため、グロピウス、マイヤーの思想はバウハウスの思想に強く現れたが、ミースはバウハウスの継続に尽力していた時代であり、ミース独自の新たな思想の介入は少なかったといえよう。

2-2 日本人留学生

(1) 水谷武彦

日本で最初にバウハウスへ留学したとされているのが、水谷武彦である。水谷はグロピウスとマイヤーの両時代にまたがって在籍していた。帰国後、バウハウスを日本に紹介しようと多くの紹介文を公表する。それにおいて水谷は、マイヤーの「建築＝機能×経済」に共感を抱いたと発言している。⁸また、バウハウスの教育理念全体から、カンディンスキーやモホリの造形理念のみを部分的に抽出し、独自の「生活構成」という概念へと昇華し広めていった。⁹この「生活構成」は後の川喜田煉七郎の「構成教育」に受け継がれ、バウハウスの造形教育を川喜田とともに啓蒙した人物であるといえよう。

(2) 山脇巖

建築家である山脇巖は、妻の道子とともにバウハウスへ留学し、ミースの教育体制のもと二人は学んだ。山脇巖は帰国後、自身の著書においてアルベルスの材料学、そしてカンディンスキーの造形理論と分析的描写に関する授業の二つについて言及してお

り、¹⁰バウハウスの造形教育に感心したことが窺える。さらにミースの建築観は、「形態の完璧さの追求、知的で単純明快、開放的空間の創造をもって工業的な建築を芸術的に高める」という点において、¹¹山脇巖が建築に求めていたそのものであったと語っている。また建築作品においてデザインを人間の生活様式に結びつけようと試みたという。¹²このような志向は、グロピウスが生活を構成的に捉え、建築によって統合される生活空間のすべての造形物の中に、一貫する近代性の創造を目指すという考えに繋がるものであるといえよう。

(3) 山脇道子

染織家の山脇道子は、夫の巖に同行するかたちでバウハウスへ留学した。道子はカンディンスキーの造形理論を夫の巖とともに受けたと語っており、このようなバウハウスの教育を受けることによって、今まで無意識に美を感じていたものに対し、その美を理論付けることが出来たと後に述べている。¹³帰国後、道子は、従来の「おりもの」から造形理念に基づいたテキスタイルデザインを創始し、帰国後の活動はバウハウスの造形理念に影響を受けたといえる。

(4) 大野玉枝

染織家の大野玉枝も、バウハウスへの留学期間がわずか4ヶ月という短い期間であったが、水谷、山脇夫妻に続く4人目のバウハウス留学生であった。ナチスの圧力によりバウハウスが閉鎖され、大野は帰国を余儀なくされたが、帰国後、「用即美」を掲げる実在工芸美術会の公募展に山脇道子と出品するなど機能主義デザインを実践していた。また、桑沢洋子は大野を「そのデザインに於て、又材料の使ひ方に於て、新しい感覚を思ふままに發揮されて居ります」と紹介し、¹⁴バウハウスでの基礎教育が大野の作品の基盤になっていることを指摘している。

3. 日本におけるバウハウス紹介

バウハウスが初めて雑誌で紹介されたのは、1925年に雑誌『みづゑ』で仲田定之助が書いた「国立バウハウス（一）（二）」である。その後、30年代前半にかけてバウハウスが雑誌で紹介され、日本においてバウハウスがひとつの流行となっていった。当時の雑誌におけるバウハウス紹介の仕方を考察する。

3-1 見学者によるバウハウス紹介

雑誌『みづゑ』¹⁵において、仲田はグロピウスの言葉を借りてバウハウス創設時の基本的理念を包括的に紹介しており、さらにカリキュラムについても紹介している。しかし、その紹介は具体的な指導方法ではなくその目的のみに留まっている。その後、バウハウス見学者の大内秀一郎、堀口捨巳がバウハウスの紹介文を書いているが、その内容は不十分なものであり、バウハウス自体の思想やカリキュラムには触れられてない。見学者による紹介は具体的な内容について述べられておらず、当時の読者はバウハウスが教育機関であるという実体を把握することは難しかったと推測できよう。

3-2 バウハウス特集記事

日本にバウハウスが初めて紹介されて4年後、雑誌『建築新潮』¹⁶と『建築紀元』¹⁷においてバウハウスの特集記事が組まれた。それぞれの記事の執筆者のほとんどが、実際にバウハウスを訪れたことのない人たちである。その当時、バウハウスの業書『バウハウス』が続々と日本に届いていた頃であり、当時の日本人はバウハウスに実際に訪れていなくとも、バウハウスについて学ぶことができた状況であったと推測できよう。さらにこの2つの雑誌の内容をみると、以前のバウハウス紹介記事に比べ、思想やカリキュラム、さらにその指導方法にいたるまで紹介されている。また、バウハウスの住宅と造形教育を重点的に紹介していることから、日本人建築家や芸術家のバウハウスへの関心を読み解くことができる。

3-3 水谷武彦によるバウハウス紹介

水谷は帰国後、バウハウスの紹介文を雑誌に記載し、その啓蒙活動を行ってきた。帰国直後はバウハウスの名前を日本に浸透させるため、その全体像を紹介し、この概要に加え、アルバースの講義といった具体的な授業風景の描写がなされた。¹⁸この水谷の紹介文によってはじめて、バウハウスが教育機関であるという日本人の理解が深まったといえるであろう。さらに、バウハウスの「手工と実験の経験」を重要視するという思想は、実際に教育を受けた水谷によってのみ伝達可能であったといえよう。その後水谷は独自の「構成」という概念を取入れてバウハウスの紹介し、その啓蒙活動を行うようになる。

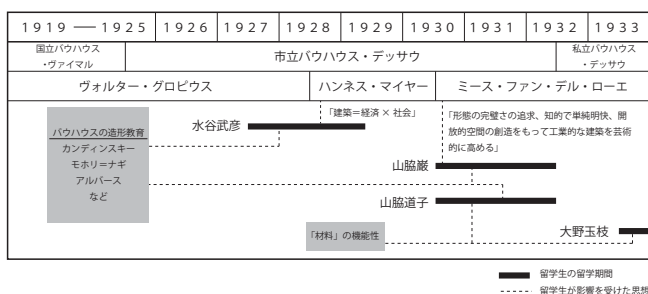


表1：日本人留学生の留学時期と影響を受けた思想

4. デザイン教育に与えた影響

4-1 川喜田煉七郎による「構成教育」

水谷の「構成基礎教育」とは各五官の基礎訓練による制作と五官の総合的な制作によって、人間の美的感覚に訴える造形を生み出す教育¹⁹であり、その概念と川喜田独自のバウハウスへの解釈を持って、川喜田は「構成教育」を確立させた。川喜田は多くの技術者に平均的に共有されるべく系統化された技術の獲得を「構成教育」の目指すべきところとし、「経験的ではあるが共同研究によつて」²⁰とあり、グロピウスと同様、身体的経験も重視していた。

4-2 「構成教育」に対する受容と批判

「構成教育」は川喜田が主宰する「新建築工芸学院」において啓蒙された。研究生である教育家の武井勝雄は、「構成教育」を一般教育の造形教育として普及させ、このことは美的感覚に訴えるための造形教育という新規性、そして誰もが享受可能な教育といった点で評価されたといえる。しかし、川喜田の「構成教育」は「神秘的な」ものであり「非科学的な」ものとして建築技術者からは批判された。²¹バウハウスの造形教育は基本的技術の取得のための「基礎教育」であり、バウハウス思想を実現するための一方法論にしかすぎない。川喜田はその一部分のみを抽出し、さらに独自の思想へと変換した。このことは、川喜田の「構成教育」を通してバウハウスの造形理念が建築技術者から受容されなかった理由のひとつといえよう。

4-3 桑沢デザイン研究所による「構成教育」

「新建築工芸学院」の生徒であった桑沢洋子は1954年に「日本のバウハウス」とまで言われた桑沢デザイン研究所を設立し、デザイン教育を率先する

立場となった。彼女は川喜田の「構成教育」カリキュラムの中心として扱い、その普及を引き継いだ。

(1) 高橋正人の「構成教育」

高橋は、川喜田の「構成教育」の理念を引き継ぎ、センスを獲得する手段として実体験をより重要視している。²²川喜田と同様、「非科学的」なものであるが、「視覚言語」という概念を用いて、実体験から得られる感覚（「視覚言語」）を一般化している点で、川喜田の「構成教育」を深化させたものといえる。

(2) 勝見勝の「構成教育」

勝見はバウハウスの造形教育の中から、視覚と触覚の重要性を迫及する思想を、「構成」という概念で抜き出した²³。それをバウハウス以外の教育理念とともに発展させ、「構成教育」を、人の知覚をより科学的に裏付けたという点で、再定義したといえる。

4-4 その他の教育に与えた影響

(1) 大阪市立工芸学校における教育

大阪市立工芸学校の山口正城もまたバウハウスの教育を押し進めたひとりである。具体的内容は明らかではないが、彼の授業を受けた早川良雄の発言²⁴から、山口は「デザイン」という言葉すら浸透していなかった当時の若者たちに、バウハウスの理念にそって「デザイン」を教えた教育者のひとりであったことが判断できる。

(2) ニューバウハウスからの影響

桑沢デザイン研究所の石元泰博も「構成教育」を教えていたが、彼はニューバウハウスにおいてモホリ=ナギから学んだ影響が強い。²⁵そのため材料の可能性や仕事の原理といった、より機能主義的な教育を求めたと推測でき、この教育の思想はグッドデザイン運動に引き継がれたといえる。

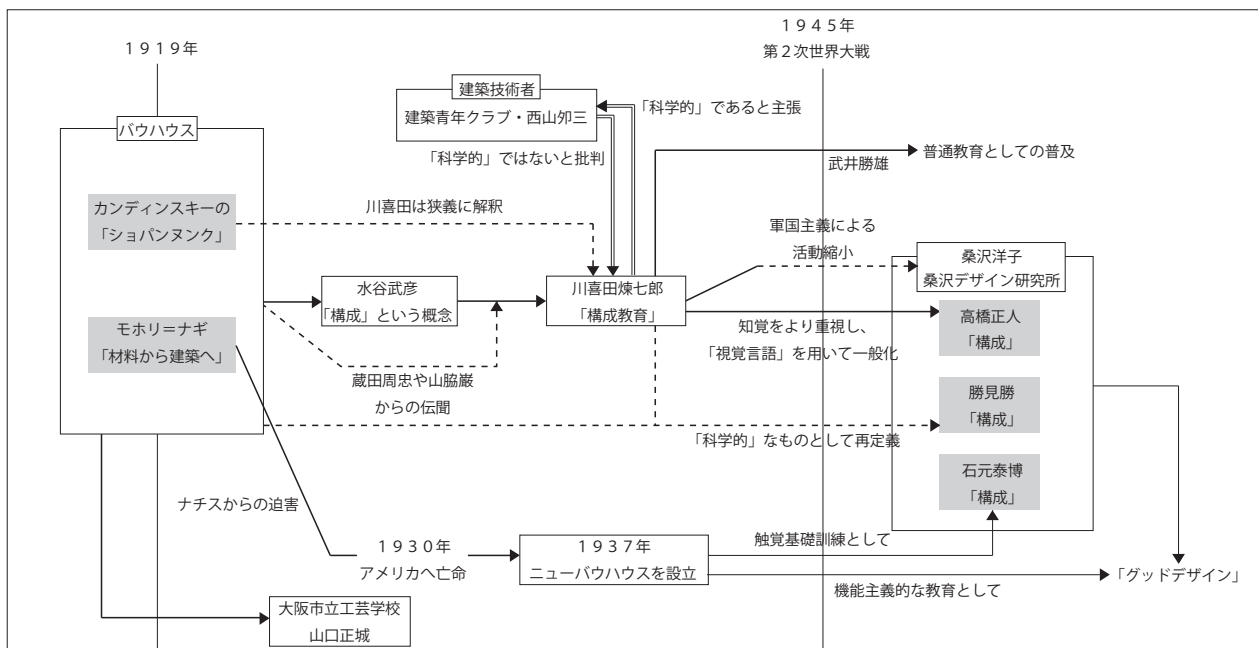


表2：デザイン教育に与えた影響

5. 生産体制に与えた影響

5-1 大量生産・規格化を目的として研究機関

バウハウスの大量生産・規格化の思想に影響を受けた研究機関は「形而工房」と「日本トロッケンバウ研究会」であった。

(1) 形而工房

蔵田周忠を中心として設立され、バウハウスの大量生産の思想に影響を受けた蔵田のデザインに対する考え方が活動の中心であった。研究の中心は家具であったが、バウハウスのパイプ椅子の実験は経済的ではないとし、蔵田は日本の曲げ木に着目した。バウハウスの大量生産という思想や方法論のみを採用し、材料は日本の独自ものを採用したといえる。

(2) 日本トロッケンバウ研究会

トロッケンバウとは、グロピウスが試作していた乾式構造住宅のことで、建築生産における標準化による住宅の大量生産を目的としている。日本トロッケンバウ研究会はこの乾式工法の量産住宅研究所である。しかし、日本でトロッケンバウを実践するにはアメリカの生産システムの介入や調達材料の制限によって、²⁶バウハウスのトロッケンバウを純粋に再現することは出来なかった。バウハウスの住宅における方法論のみを採用し、日本に適した形で展開していったといえる。

5-2 工芸の分野からの反応

産業革命による技術革新により、日本の工芸は「産業工芸」と「工芸美術」という分野に分けられる。

(1) 産業工芸

「産業工芸」は生産方式においては機械化を承認し、「用即美」の達成を目指した工芸である。その最終の目的は輸出拡大のための固有工芸の追求である

ため、バウハウスの規格化の思想は受容しなかったと推測できる。その後、戦時体制の国策により材料の制限を受ける。²⁷規格化による大量生産を受け入れざるを得なくなるが、30年代後半はバウハウスの流行に陰りがでてきた頃であり、その当時もバウハウス思想の受容はなかったと推測できよう。

(2) 工芸美術

「工芸美術」は「産業工芸」と一線を画するため、「美」のみを追求したが、そのことはさらに「工芸美術」の社会的立場を危うくした。そこで、「用」を引き戻し「産業工芸」との立場を近づけたのが実在工芸美術会である。この公募展にバウハウス留学者である山脇道子と大野玉枝は出品したが、評価するような発言が見られないことから²⁸、バウハウスが目指した標準化、量産化というモダンデザインの理想に抵抗を感じていたと推測できよう。

5-3 バウハウスへの回帰

(1) アメリカの生産体制からの影響

第二次世界大戦後の日本の産業はアメリカの影響を強く受け、大量生産を押し進める商業主義的な生産体制へと完全に移行する。しかし、それと同時に大量生産された品の品質の悪化を招くこととなる。

(2) グッドデザイン運動

品質の悪化を改善しようと起こったのが「グッドデザイン運動」であり、大量生産で「用即美」を伴った機能主義デザインの実現を目標とした。この運動はアメリカで起こったそれを参考にしたものであり、ニューバウハウスの影響が強くあったと推測できる。さらに、運動の中心は桑沢デザイン研究所の勝見勝・石元泰博であり、²⁹バウハウスの機能主義デザインに帰結したと読み解ける。

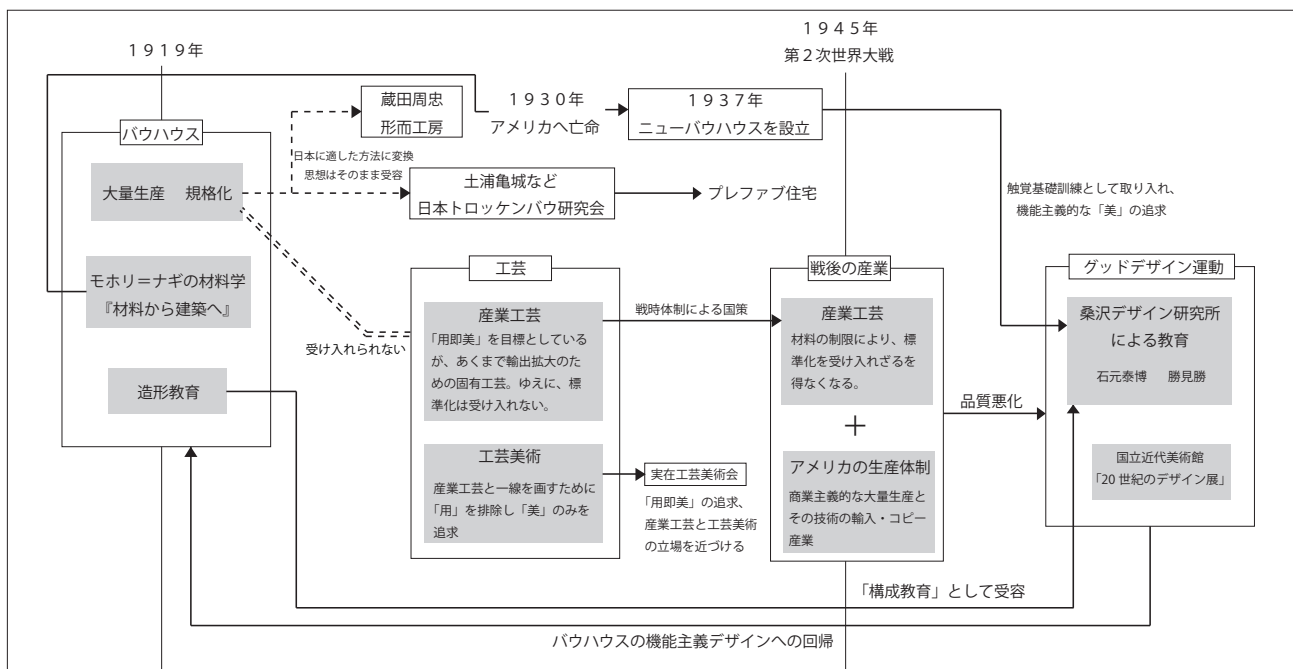


表3：生産体制に与えた影響

6. バウハウス受容の変遷とその

日本のデザイン教育と生産体制におけるバウハウスの影響の変遷をみていくと、バウハウス受容は《分散的》という言葉で定義できる。このような受容の背景として5つの事項が挙げられる。

(1) 自然工学としての建築

川喜田の「構成教育」がバウハウスの規格化による大量生産といった社会性の側面を切り離して造形教育のみを抽出した点は、建築技術者から「非科学的」である点で批判された。このことからバウハウスの本来の目的である「機械と芸術の統一」は、建築が芸術の分野である西欧によってのみ実現可能なことであり、建築が自然工学の一部である日本においては、建築技術者からすると受け入れられなかったと推測できる。

(2) 合理化の段階的実現

日本の生産体制の変遷を考察することで、機械化による「用と美の合理化」、戦時期の国策による「規格化・大量生産における合理化」、そして戦後の住宅不足からくる「生活の合理化」といった、3つの合理化を段階的に解決してきたことが読み解ける。この段階的な合理化の実現は、日本の製造力の低さに依るところが大きいといえる。しかし、この合理化のすべてをバウハウスは見据えた思想を展開しており、この段階的な合理化の実現はバウハウス思想を段階的に、そして部分的に受容した要因のひとつであると推測できる。

(3) ビジュアルイメージとしての受容

バウハウスは過去のアカデミー教育から脱却し、実際の手工と実験による教育機関を目標としている。しかし、日本におけるバウハウス受容は雑誌での視覚的情報と文章であるため、その受容はバウハウスが目的としている実際の手工と実験による教育ではない。これもバウハウス思想の受容を屈折させた要因のひとつであるといえよう。

(4) 「バウハウスデザイン」としての受容

戦後の「グッドデザイン運動」において、バウハウスの機能主義への回帰が起こったと述べた。その当時、文献や雑誌からしか知識を得る方法はなかったため、バウハウス思想をすべて模倣しうる製造力と合理化を日本は達成したにも関わらず、バウハウスを「バウハウスデザイン」という表面上のデザインとして受容していたといえる。そのため、当時の人々は本来のバウハウス思想を感覚的にしか理解していなかったといえる。

(5) 商業の発達による「個人」の尊重

戦後の商業デザインにおいて、バウハウスのような機能主義デザインは存在せず、むしろバウハウス

に反撥するような動きがみられた。その原因として商業空間の発展におけるデザインの差異の追求が理由であると考えられる。

7. まとめ

本稿でバウハウスの影響をデザイン教育と造形運動の二方向から総合的にみることによって、その受容を《分散的》という言葉で定義することができた。建築では量産型住宅の方法論、デザイン教育では基礎教育における造形教育、そして工芸では規格化による大量生産の思想を個別に受容し、それらは同時に語られることなく各々系譜された。このように、アカデミー教育から脱却し、実際の手工と実験による教育機関を目指すというバウハウスの総合的な側面は受容されなかったものの、分断されたバウハウスの思想は各分野のモダンデザインの前進を後押ししたといえよう。さらに、バウハウス思想を《分散的》に捉えたからこそ、それぞれの分野で独自の解釈をすることが可能となり、さらなる新しい展開を生み出すことが出来たといえよう。バウハウス思想の《分散的》な受容は、日本にモダンデザインを定着させる一端を担っていたと評価できよう。

¹ 宮島久雄「グロビウスとデザイン論」p28-30 1964年12月

² ニコラス・ベグスナー 白石博三訳『モダン・デザインの展開 モリスからグロビウスまで』みすず書房 1957年

³ 貞包博幸「グロビウスと初期論集-その造形思想の展開について-」p41-69

⁴ 津島光「ワルター・グロビウスの建築論的研究-「国際建築」INTERNATIONALE ARCHITEKTURを巡って-」日本建築学会近畿支部 1996年

⁵ 貞包博幸「バウハウスの世界文化遺産的意義」大分県立芸術短期大学研究紀要 第43巻 2005年

⁶ 廣川修司「マイヤー主導のバウハウスにおける科学的分析の建築的空間化「社会主義国家の工場労働者用共同住宅」案(1930)」日本建築学会中国支部研究報告集 第33巻 2010年3月

⁷ ニコラス・ベグスナー「建築とバウハウス」『バウハウス』ハンス・M・ウィングラー編著 宮内嘉久編 造型社 1969年12月

⁸ 水谷武彦「バウハウスと「建築に対する主張」」『アトリエ』婦人画報社 1930年8月号 p62-76

⁹ ルイック・ペトラ「水谷武彦-バウハウス留学の再考」日本建築学会北陸支部研究報告書第48号 2005年7月

¹⁰ 山脇巖『続・櫻』井上書院 1973年

¹¹ 勝又模哉・藤谷陽悦「山脇巖に関する研究-一連の住宅作品からみるバウハウス思想とその受容-」日本大学生産工学部第43回学術講演会 2010年12月4日

¹² 同前

¹³ 山脇道子「バウハウス・デッサウと私」『現代の眼』1971年2月 p5

¹⁴ 桑沢洋子「自分の服は自分のデザインで-大野玉枝女史の巴里土産のお召物-」『流行手帖 婦人服』1934年1月

¹⁵ 仲田定之助「国立バウハウス(一)(二)」『みずる』6,7月 1925年

¹⁶ 「特輯バウハウス」『建築新潮』1929年11月

¹⁷ 「ぼうほうす」『建築紀元』秋季特集号 1929年11月

¹⁸ 水谷武彦「バウハウスはどこにあるか?どの様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして『バウハウスのデッサン(絵画素描)』について-簡単に」『校友会月報』第29巻第1号 1930年4月 p6

¹⁹ 水谷武彦「構成基礎教育」『建築画報』第22巻 1931年10月

²⁰ 川喜田煉七郎「<抽象構成練習>のメモ」『建築工芸アイシーオール』第二巻第十一号 1932年11月 p17

²¹ 西山知三『建築学入門生活空間の創造(上)』朝草書房 1983年

²² 高橋正人「デザイン講座 デザインの基礎としての構成教育の意味と内容」『KDニュース』1956年

²³ 秋山邦晴 編 高松太郎『文化の仕掛人-桑沢デザイン研究所』青土社 p276 1985年

²⁴ 早川良雄「ふたりの思い出=山口正城と瑛九」『徒然感覚』用美社 1985年 p202-203

²⁵ 「把手の実習作品-ハンドスケルプチュア」『リビングデザイン』1963年3月 p38-39

²⁶ 土浦亀城「昭和初期モダニズム 建築家土浦亀城と彼をめぐる人々」『SD』1988年7月号

²⁷ 森仁史『日本<工芸>の近代 美術とデザインの母胎として』吉川弘文館 2009年

²⁸ 木田拓也「実在工芸美術会 1935-1940:「用即美」の工芸」

²⁹ 常見紀美子「デザイン運動体としての桑沢デザイン研究所」2004年

討議

[横山教授]

まず、なぜバウハウスなのか。それから二つ目は、さっき井口くんに言ったことで、研究方法をやっばり明記してほしいということ。それから三つ目は、デザイン教育、バウハウスの考えを日本にどのように受容していったのかというときに、「構成教育」の話が中心になっていて、それ以外の教育のシステムとか思想みたいな話がどういう風に受け入れられていったか、あるいはどう変容していったかという話がなかった気がします。たぶん、「構成教育」の変容とポリシーはお互い関係していると思うんで、ここでバウハウス教育の「構成教育」以外の部分については、どういう風に日本においては取り入れられたのか。四つ目は、工業デザインがなぜ日本に取入れられなかったのかは、なかなかいい分析だなと思ったんですけども、最後の結論で、「バウハウスがアカデミズムに成り下がった」という話と、「個人の時代に突入した」ってずいぶん違うのではないのかって思います。バウハウスがアカデミズムに成り下がったのではなくて、我々が求めていたのが建築におけるアカデミズムではないのか。求めていることに対してバウハウスは違っていたっていう話ではないかと思うんですけども。ここらへんの見解を教えてくださいというのと、最後にせつかくバウハウスの研究をやって非常におもしろい分析だったのですが、では日本の大学教育、建築教育をあなたの目からどのように評価するかを教えてください。以上です。

回答

まずバウハウスをなぜ取り上げたのかなんですけど、最近、建築とインテリアの境界っていうのが無くなってきていると感じていて。以前は分化されていたもの、でも今は交わってきたもの。そういった時代になったときに、バウハウスの総合性というものを見直す必要があるのではないかということで、バウハウスを取り扱いました。

[横山教授]

もう一言だけ付け足すと、その問題意識と、ここでやった研究と少しずれているような気がしますけど。総合性みたいな話はここで触れていなかった気がします。

回答

総合性を捉えようとはしましたが、今あるバウハウスデザインというものは教育や工芸の様々なジャンルで現れて、捉えきることができない。では、なぜその総合性というものが現れなかったのか、過去に振

り返って、捉えることが出来なかった理由というものを探っていかなければ、現在でもバウハウスというものを捉えることが出来ないのではないかという問題意識のもと、受容の変遷をみていきました。

[横山教授]

わかりました。

研究方法については、本論に書いておいて下さい。構成教育以外の教育思想とかシステム、日本の建築教育を中心としてデザイン教育にどういう風に受け入れられた、受け入れられなかったか、それがどう変化していったのかを、あまり書いていなかった。

回答

バウハウスのみに限定して、それを中心として受容と批判をみていくと構成教育に主に影響していることがわかった。バウハウスが影響を与えた教育として構成教育以外のものも見ていて、論文にも大阪市立工芸学校について書いている。バウハウスというキーワードのものは扱った。

[横山教授]

さっきの総合性の話とも関連するんだけど、やっぱりバウハウスって単純に構成だけじゃなくて色々な科学的なロジック、議論を学ぼうという、まさに総合的にやろうとしてたっていう、ひとつの思想だと思うんです。では、そういう思想が日本に来たとき、どう変わっていったのか。これはまた、長くなると思いますので、そういうことも出来れば考えて頂きたい。あと、結論がちょっとおかしいんじゃないか。

回答

アカデミズムという言葉がおかしいのは、自覚しています。「アカデミズムに成り下がった」という意味というのが、バウハウスは実際の経験を重要視したものであるが、バウハウスデザインとはその結果として現れる造形です。戦後の日本において、バウハウスを知るということは、その作品が載っている雑誌を見たりといった視覚的情報というのが強かったといえます。そのときに入ってくるのが「バウハウスデザイン」という視覚的な情報で、それはバウハウスが本来重要としていた身体的経験とは違うもので、それは感覚的な受容であったということを意味しています。それをアカデミズムと間違っていて言っています。

[横山教授]

わかりました。今の説明で納得しました。最後に、日本の大学の建築教育を切ってください。

回答

工学部に建築学科はあるべきではないと思います。
今の日本にとって、空間を作ることが大切になってきて、だからこそ建築とインテリアの境が無くなって来たと感じています。バウハウスのような総合的なデザインをもって、空間を作ることが建築学科に必要なようになってくるのではと思います。

[倉方准教授]

付け足しですけど、要するにバウハウス教育がとにかく受容されなかったという当たり前のことを、改めてきちんと言うところから出発しなければいけないということで、それが今後受容されるべきだという最後の結論につながるということです。